

いのちの教育

—学生の終末期医療への関心をとおして—

佐伯 洋子

I. はじめに

日本の平均寿命は世界最長になり、保健医療システムの総合目的達成度も1位となっている¹⁾。しかし肉体は加齢と共に老いていくのは自然であり、平均寿命が延びれば寝たきりや認知症になって介護を受ける期間も長くなる。

今、終末期医療に関する議論は技術的な話が先行し、「死」とは何かという本質については遅れがちで、「死は無であり、それ以上考えるのは意味のないことで生の充実を図ることがすべて」「死んだらゴミ²⁾」といった死生観の空洞化³⁾が現実のものになってきている。

筆者は終末期医療、臓器移植、また死後受精、代理出産などのいのちの尊厳にかかわる問題で将来、重大な判断を強いられるかもしれない若者たちに、的確な判断材料を提供するため『いのちの教育』についてアンケート調査を実施した。その結果、子ども時代に死に関する話題を家族で話し合った経験の有無、動物の飼育経験の有無によって宗教行動、死生観に違いがあった。また学生の死生観に関する項目の肯定率ⁱ⁾が低い、信仰心は大事だと思っているが特定の宗教を信仰するものは2割もない、自殺を肯定的に捉えている者は生活リズムが不規則で遅寝遅起でありテレビゲームで遊ぶ時間も長い、など報告した⁴⁻⁷⁾。

本報は佐伯ⁱⁱ⁾の続編として「終末期医療への関心」と学生の死生観、死の認識など他の項目との関連について再分析し、若干の知見を得たのでここに報告する。

II. 方法

1. 対象

対象は近畿圏に存在する6大学の学生で対象者の性別、学部別の内訳は表1に示すごとくであった。なお学部別は幼児教育と初等教育をまとめて“保育・初等”とし、医学部を“医学”その他の学部を“その他”とした。平均年齢は19.9歳（男子M:20.7 SD:2.46、女子M:19.7 SD:1.56）であった。

表1 性別、学部別人数の内訳

上段：人数、下段：%

	全体	保育・初等	医学	その他
合計	1497 100.0	788 52.6	65 4.3	644 43.0
男	304 100.0	58 19.1	34 11.2	212 69.7
女	1193 100.0	731 61.3	31 2.6	431 36.1

$\chi^2(2) : 186.68 \quad p < 0.001$

2. 方法・調査内容

調査内容は属性および宗教活動、死の認識、死に対する不安⁸⁾、死生観⁹⁾など50項目からなるアンケート調査である。

調査期間は平成16年12月から翌年2月にかけてスポーツ、健康関連科目の授業の中で実施した。今回の調査に関係する『いのちの教育』関連の教科は、医学部学生では1回生で一般教養科目を受講しているため『い

i) 肯定率とは死生観の10項目それぞれに“そう思う”と回答した者の割合を示す

ii) 佐伯洋子他(2008):『いのちの教育』に関する研究、大阪観光大学紀要(8) 59-68

のちの教育』に関連する教科はなく、またその他の学生の所属する学校でも開講されていない。

3. 統計処理

統計処理は χ^2 検定で有意水準は5%とした ($p < 0.05$)。

終末期医療の要因分析は林の数量化Ⅱ類を適用した。なお変数選択においてサンプルの少ないカテゴリについては、カテゴリ統合し解析した。

Ⅲ. 結 果

1. 調査結果の概要

①属性：図1は学部別に終末期医療に関心が有る者(以後、関心群と記す)と終末期医療に関心の無い者(以後、無関心群と記す)の割合を比較したものである。

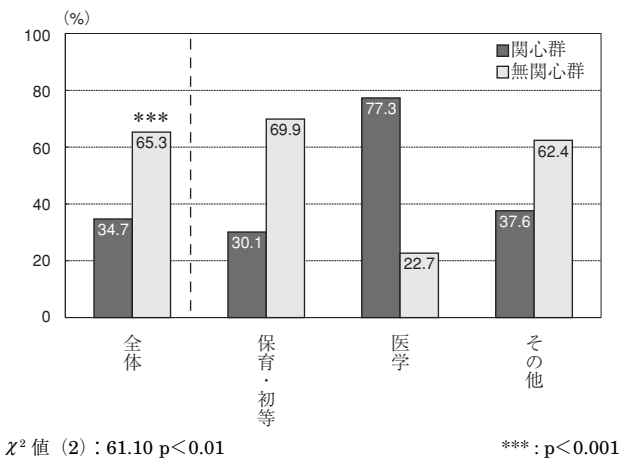


図1 性別、学部別、関心群の割合

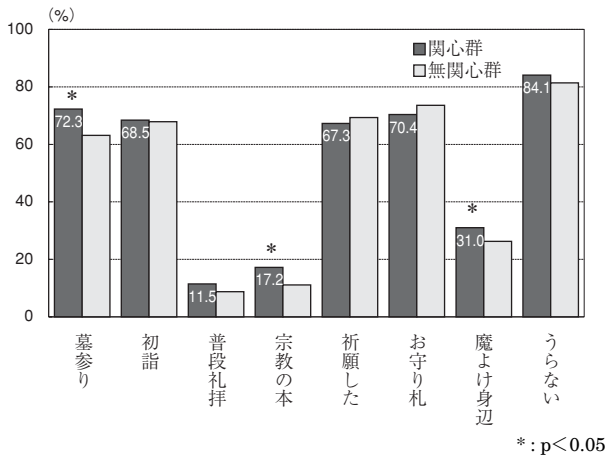


図2 宗教活動

全体では関心群 35%、無関心群 65% で関心群が有意に多かった。学部別に見ると、「医学」は関心群 77% であり、他の学部に比べ関心群は多かった。「保育・初等」「その他」は無関心群が多く学部間で有意差が認められた。

「終末期医療への関心の有無」と「家族構成」との関連性について検討したが、関心群と無関心群の間に有意差は認められなかった(表記略)。

②宗教活動：「信仰心は大切」と思っている者の割合は関心群 55%、無関心群 47% であり、関心群が有意に多かった。また特定宗教を持つ者は関心群 20%、無関心群 16% であり、関心群は特定宗教を持つ者が多い傾向を示した(表記略)。

つぎに図2は終末期医療への関心の有無別に、日常生活の中での宗教活動の結果である。両群間で有意差の出た項目は「1年に何回か墓参りに行く」「魔除けを身辺におく」「経典や聖書など宗教の本を読む」の3項目で、いずれも関心群が有意に多かった。

③死の認識：図3、図4は終末期医療への関心の有無別に「子どもの頃の死の話題」は家庭でどのように取り扱われていたか(図3)、また「飼育動物の死の経験」があるか(図4)の結果である。まず「子どもの頃の死の話題」について見ると関心群は「家庭でおおっぴらに

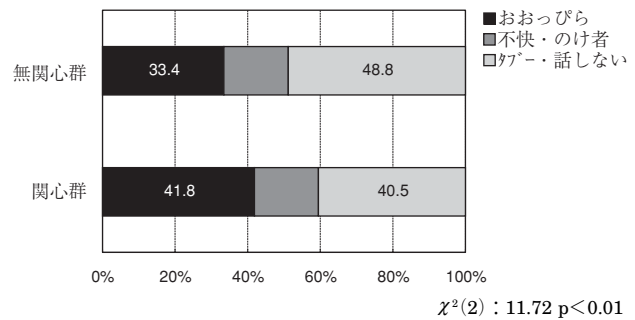


図3 子どもの頃の死の話題

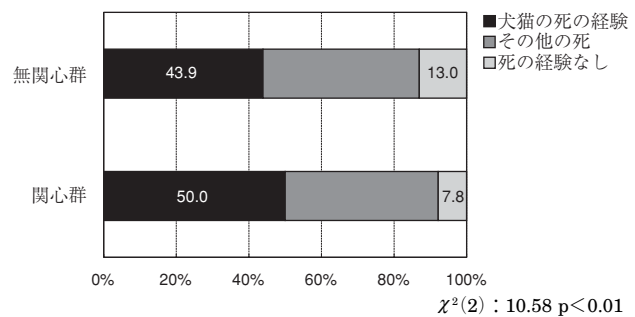


図4 飼育動物の死の経験

話している”が42%に対し、無関心群は“タブー・話をしない”が49%と多く、両群の間で有意差が認められた。

「飼育動物の死の経験」についてみると関心群は飼育動物の“死の経験がある”が92%、無関心群は87%であり、これも両群間で有意差が認められた。

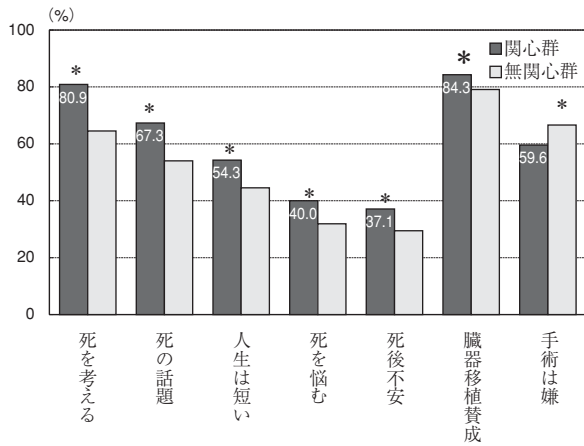


図5 死への不安

*: p<0.05

④死への不安：図5は終末期医療への関心の有無別に「自分の死に対する不安、恐れ」の11項目の内、両群間で有意な差が認められた7項目についての結果である。有意差の認められた項目は“死について考えることがある”“人が死のことについて話したら気になる”“人生はなんと短いのだろうと考えることがある”“死ぬことを考えて悩むことがある”“死んだ後のことを考えると悩む”の5項目はいずれも関心群が有意に多かった。一方、医療との関連では“臓器移植に賛成”は関心群84%、無関心群79%であり、“手術は受けたくない”は関心群60%、無関心群67%となり、関心群は医療に関して積極的な姿勢が認められた。

⑤死生観：図6は終末期医療への関心の有無別に死生観ⁱⁱⁱのそれぞれの項目について両群を比較した結果である。ほとんどの項目で関心群の方が肯定率が高い傾向を示していた。

なお「運命論」から「靈魂不滅」の5項目は宗教的見識の中に見られる死後の世界に対する意識であり、「殉死」から「情死」の5項目は死に様についての態度を問うたもので、死んでも靈魂は家族から離れないとい

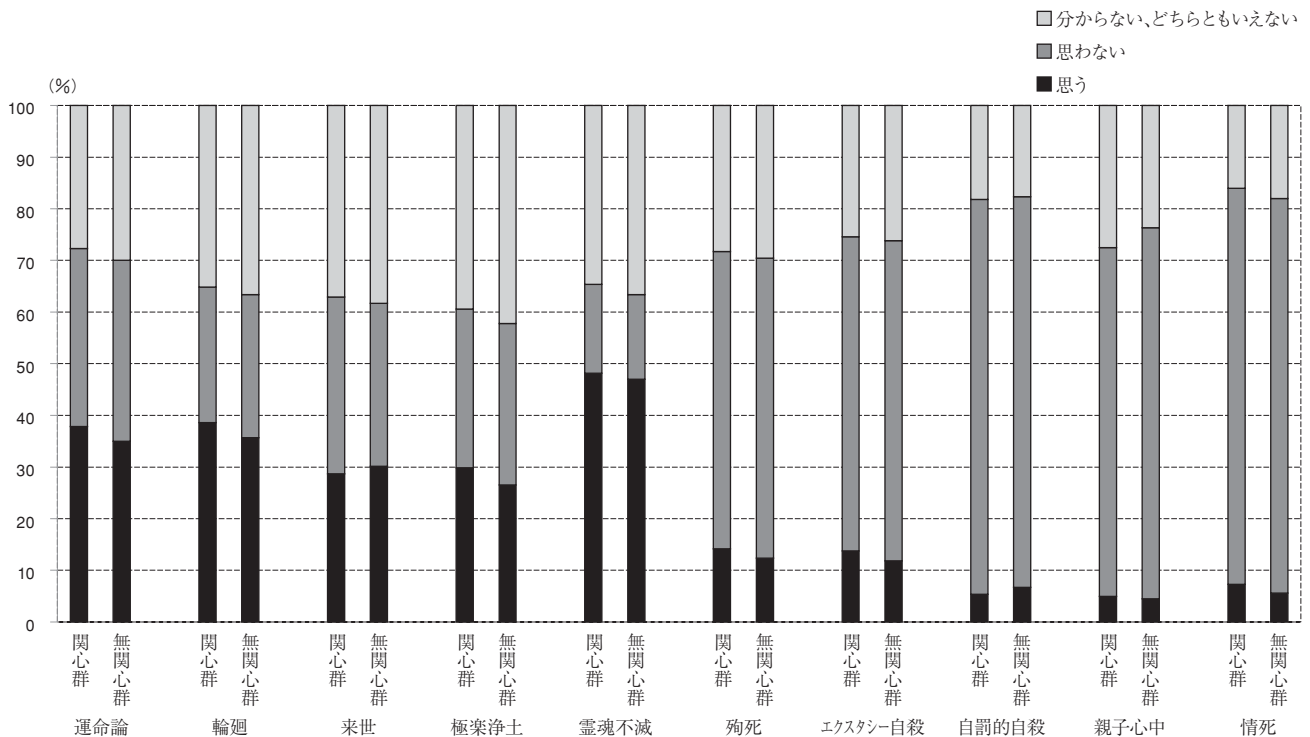


図6 死生観

iii 死生観の質問項目は学生が理解しやすいように書いている。たとえば運命論についての質問は「人がどこで生まれるれどこで死ぬかはその人の運命として決まっており、人の力では変えられない」またエクスタシー自殺については「自分の主義主張のために死ぬことは立派なことである」など

項目	アイテム	カテゴリー名	カテゴリスコア	レンジ	偏相関 レンジ順位	← 負 正 →
属性	性別	男 女	-0.0369 0.0058	0.0427	0.1286 25位	
	所属学部、学科	保育・初等 その他 医学	-0.0535 -0.0010 0.6532	0.7066	0.2781 1位	
	課外活動の有無	はい いいえ	0.0366 -0.0517	0.0883	0.0738 14位	
	健康評価	不健康 健康普通 健康	0.0851 0.0084 -0.0585	0.1436	0.0879 8位	
	生活リズム	不規則 普通 規則的	0.0069 -0.0326 0.0136	0.0462	0.0412 23位	
	就寝時刻	0時まで 0時以降	-0.0549 0.0257	0.0805	0.0695 18位	
	睡眠時間	360分以内 360分以上	-0.0089 0.0084	0.0173	0.0253 28位	
	家族構成	両親だけ、片親と祖父等 両親と祖父・母	-0.0379 0.1306	0.1685	0.1090 6位	
	テレビゲーム実施有無	した していない	-0.0021 0.0455	0.0475	0.0021 22位	
	飼育動物の死の経験	犬猫 その他の生物の死 経験なし	0.0339 0.0230 -0.3204	0.3542	0.1462 3位	
宗教活動	特定宗教	あり なし	0.0616 -0.0131	0.0746	0.0938 20位	
	信仰心大切	必要 不必要	-0.0002 0.0002	0.0005	0.1699 32位	
	墓参り	する しない	0.0370 -0.0756	0.1126	0.0961 11位	
	宗教の本	読む 読まない	0.0289 -0.0038	0.0326	0.0368 26位	
	魔よけ身辺	身辺に置く 身辺に置かない	0.0631 -0.0251	0.0883	0.0631 15位	
死の認識	生命は有限と気付いた時	幼稚園まで 小学校1年以上	-0.0008 0.0009	0.0018	0.0526 31位	
	有限気づきのきっかけ	昆虫や動物の死 身近な者の死 テレビ・情報誌等	0.0618 -0.0228 -0.0936	0.1554	0.0871 7位	
	死に対する考え方への影響	身近な者の死 マスコミなど 宗教的な考え 自己洞察 家族・自分の健康状態	-0.0007 0.0793 0.2264 -0.1315 -0.0723	0.3579	0.1353 2位	
	子ども時代の死の話題	おっぴら 不快・のけ者 タブー・話さない	0.0162 -0.1594 -0.0420	0.2014	0.0956 5位	
	死の不安	死は怖い	はい いいえ	0.0028 -0.0143	0.0172	0.0614 29位
死の話題		気になる 気にならない	0.0336 -0.0474	0.0810	0.0594 17位	
手術		受けたくない 受ける	-0.0060 0.0101	0.0161	0.0310 30位	
臓器移植		賛成 不賛成	0.0069 -0.0368	0.0437	0.0036 24位	
死後のことが不安		はい いいえ	-0.0718 0.0283	0.1002	0.0792 12位	
死を考える		はい いいえ	0.0748 -0.1513	0.2261	0.1679 4位	
人生は短いと思う		はい いいえ	0.0719 -0.0552	0.1271	0.0815 9位	
死生観	運命論	運命論 非運命論	0.0778 -0.0482	0.1261	0.0935 10位	
	輪廻	輪廻 非輪廻	-0.0157 0.0095	0.0252	0.0093 27位	
	来世	来世 非来世	-0.0421 0.0164	0.0586	0.0291 21位	
	極楽浄土	極楽浄土 非極楽浄土	0.0543 -0.0221	0.0764	0.0418 19位	
	靈魂不滅	靈魂不滅 非靈魂不滅	-0.0445 0.0398	0.0844	0.0761 16位	
	自殺	肯定 否定	-0.0952 0.0025	0.0977	0.0081 13位	

図7 終末期医療への関心の要因分析

う「靈魂不滅」の肯定率は両群とも一番多く、ついで輪廻、運命論、来世意、極楽浄土と続いた。自らのいのちを絶つという死に様についてはいずれも肯定率が低かった。また肯定率を重視し、回答欄の「考えたことがない・わからない」が、「情死」「自罰的自殺」の項目を除いた項目では25%~39%存在した。

2. 終末期医療への関心を決定する要因の分析

次に終末期医療への関心が、どのような要因により決定されているのか探るために「終末期医療への関心」を目的変数にし、説明変数として属性、宗教活動、死の認識、死への不安、死生観から32変数を選んで林の数量化Ⅱ類によって解析した(図7)。

カテゴリ・スコアから終末期医療への関心に影響を与えている条件を検討すると、肯定的に作用しているカテゴリは「所属学部」における“医学部”で、他に比べて目立って高い数値を示している。次いで「死に関する現在の考え方に影響を与えたもの」の“宗教的な考え方”、「家族構成」の“両親と祖父母と同居・両親と祖父もしくは祖母のいずれかと同居”であった。反対に否定的に作用しているカテゴリは「飼育動物の死の経験」の“飼育動物の死の経験がない”、「子どもの頃の死の話題」の“不快・のけ者にされていた”、「死について考えることがある」の“いいえ”であった。

次に説明変数が終末期医療への関心に対してどれだけ関わりが深いか、レンジの大きいもの5位までを検討した。

まず終末期医療への関心にもっとも影響力の高いものは「所属学部の違い」であり、当然予想されるように医学は終末期医療への関心が高かった。一方、保育・初等は終末期医療への関心は低かった。

第2位はレンジが大きく下がるが「死に関する現在の考え方に影響を与えたもの」であり、“宗教的な考え”また“マスコミ・映画の影響”が終末期医療への関心が高く、“自己洞察”は終末期医療への関心は低かった。

第3位は「飼育動物の死の経験」であり、“犬猫の死の経験のある者”は終末期医療への関心は高く、“飼育動物の死の経験の無い者”は終末期医療への関心は低かった。

第4位は「死について考えることがある」であり、“はい”は終末期医療への関心は高く、“いいえ”は終末期医療への関心は低かった。

第5位は「子どもの頃の死の話題」であり“家庭で

おおっぴらに死を語っている”は終末期医療への関心は高く、“不快・のけ者にされていた”“タブー・話をしない”は終末期医療への関心は低かった。なお、これらの判別の中率は69.9、相関比は0.202であった。

IV. 考 察

本研究の「終末期医療への関心」について要因分析した結果は、分析精度を示す相関比が0.202と低いため判別が成功したとは言えないが、それでも一応の資料を提供しているといえる。それは将来、医療現場で働く医学部学生が、終末期医療への関心があるのは当然予想していた結果であり、家族構成においても3世代同居は親と祖父母の関係において老化していく肉体と年長者へのいたわりを学び、また身近にいる動物の死の経験をとおして生命の有限を知るなど、これらの体験を通して自然に死について語られる中で、終末期医療への関心が高くなると考えられるからである。反対に終末期医療への関心が低い者は飼育動物の死に直面する機会も少なく、家族と死について話し合うことがない。したがって死について考える機会が少ないため、死に対する不安も低いといえるのではなからうか。実に興味深い結果である。

次に死生観の肯定率が30年前の林の調査⁴⁾した時よりも低く、特に死に様についての態度が著しく下がっていた。これは肯定率が下がり、否定率が上がったというものではなく、“わからない・どちらでもない”の回答の割合が増えたことによる。もともと死生観の定義は曖昧で、現在では生の充実のために死をいかに考えるか、また死に望んで何を念じ、何を願うかと考えられている¹⁰⁾。したがって重要なことは学生が生きる目的、意味をどのように捉えているのか、という点であろう。

医療技術の進歩は目覚しく、生命の誕生においては人工授精、代理母、はてはミイラの皮膚からDNAをとりだし人工子宮で生育というようなことも可能¹¹⁾になってきている。

生命の終焉においては、苦痛の緩和処置、安楽死そして生命維持装置でベッドで横たわる生活がある。また、新鮮な臓器を手に入れるために、死の判定を早くしなければならない¹²⁾という臓器移植に関連する問題もある。ちなみに現在、臓器移植希望患者数は約4700名¹³⁾と著しく増加している。このように我々の周りには人間の生死に関わるさまざまな問題が浮上している。自分が終末期を迎えた時、また愛する親族の終末期医療に臨んで「人としての尊厳」をどう保つかなど重要な決断をし

なければならない時に、それぞれの死生観（人生観）が問われる。ちなみに死生観で共通していることは『死は終わりでない』との考え¹⁴⁾であり、肉体は減んでも魂は永遠の生命を持つと確信している人は死を受け容れる覚悟ができ、死の恐怖から開放される¹⁵⁾ともいう。

昔は自宅で家族の祝福を受けて生まれ、家族に看取られながら生涯を閉じた。その中で人はこの世に生まれる意味と死を迎える現実を自然に学び、これが『いのちの教育』の原点¹⁶⁾であった。自然の移り変わりや動植物の成長過程を見ながら、また愛するものの病や死を体験することによって、生病老死というライフサイクルを我がものとして受け容れていくことができるようになる。今回の調査からも分かるように家庭できわめて自然に語られてきた死に関する話題がみられなくなっていることである。したがってあらゆるライフステージにおいて、いのちの尊厳について触れることが必要であろう。特に幼児教育に従事することを目的に学んでいる学生が終末期医療への関心が薄い結果が出たことは非常に残念である。それは幼児期に動植物をみつめながら「生命の誕生、成長、死」といった生命のサイクルを理解させることは重要なことであると考えているからだ。

また、今回の調査からエネルギーな若者が教室で学ぶだけでなく、学外学習として老人ホームなど高齢者との接触の機会を求めることも、人の終末を考える機会となるのではないかと考える。

いのちの教育のアンケート調査を通して学生の終末期医療への関心に影響を与える要因について見たが、多くの要因の影に核家族、幼児期の体験、死生観の未熟さなどが関連していることが推測された。今後、今回の成果を教育の場に反映させたいと考えている。

V. ま と め

近畿圏に在住する6大学の学生を対象に『いのちの教育』に関するアンケート調査を実施し、終末期医療への関心についての実態を調査分析した結果、下記のこと明らかになった。

1. 終末期医療に関心の有る者（関心群）の割合は全体で約35%であり、学部別では医学部が約77%で多く、学部間で有意差が認められた。
2. 宗教活動は“先祖の墓参りをする”“聖書・経典など宗教の本を読む”“魔除けを身近に置く”の3項目は関心群が有意に高かった。
3. 子どもの頃、家庭での死の話題については関心群

は多いが、無関心群はタブー視し、語られることはほとんどなかった。また飼育動物の死を経験した者は関心群に多かった。

4. 終末期医療への関心を規定する要因をレンジ順位5位まであげると①所属学部 ②死に対する考え方 ③飼育動物の死 ④死を考える ⑤子どもの頃の死の話題であった。

以上、今回の調査を通して直接実体験し、全身でいのちの尊厳を知ることの重要性を再認識した。今後、質問内容についても再検討し“いのちの教育”に資する結果を導き出したい。

文献

- 1) 厚生労働省編（2004）：現代生活と健康、厚生労働白書（平成16年版）、2-3.
- 2) サンケイ新聞（2006）：12/18朝刊、死を考える.
- 3) 広井良典（2001）：死生観を問い直す、筑摩書房、11.
- 4) 佐伯洋子他（2005）：いのちの教育Ⅱ－青年期の宗教活動と死生観一、近畿学校保健学会第52回講演集、16.
- 5) 佐伯洋子他（2005）：いのちの教育Ⅳ、一青年期の死生観を通して一、身体運動文化関西支部第11回大会号
- 6) 佐伯洋子他（2006）：いのちの教育Ⅰ-2、一子どもの時代の「死の認識」と飼育経験から一、幼児健康教育学会第24回大会号、36-37.
- 7) 佐伯洋子他、（2006）：いのちの教育－青年の死生観一、日本教育医学学会第54回大会、61.
- 8) 木村正治（1990）：小学生の死に対する不安・恐怖の関連性についての一考察、学校保健研究.
- 9) 林 知己夫（1984）：多次元尺度解析法の実際、サイエンス社、107-121.
- 10) 山下愛子他（2006）：大学生における死生観の構造および孤独感との関連、横浜国立大学教育相談・支援センター研究論集（5）、41.
- 11) 岩本一夫（1995）：宗教学がわかる、宗教と暴力、朝日新聞アエラ発行室、125-129.
- 12) 石橋孝明（1998）：今、生きる意味を問う一応用倫理学の諸問題一、ナカニシ出版、31.
- 13) 厚生労働省編（2004）：保健医療資料編、厚生労働白書（平成16年度版）321.
- 14) 広井良典（2001）：同上、212.
- 15) 原田善仁（2006）：真正面から死生観の学習を、サンケイ新聞4/1朝刊.
- 16) 佐藤 智（1987）：ターミナルケアにおける死の教育一病院・ホスピスで一、保健の科学、杏林書院、496-501.